

腸管出血性大腸菌 O157 集団感染とその対策

山崎 省二

昨年の腸管出血性大腸菌 O157（以下 O157）による大規模食中毒事件は社会的にも行政的にも大きな衝撃を与え、感染症とりわけ細菌感染症の時代は終わったとの認識の広がりは根本から覆され、幼児や学童を持った親や関係教育機関、高齢者のみならず国民一般の身近な関心事となった。また、十分に発達したと思われがちであった公衆衛生の整備の必要性和食品の衛生管理の重要性がクローズアップされた。

O157 感染に関する特集は社会的、行政的な問題と関連し、今までにいろいろな分野で数多く組まれてきた。しかし、本年になってもなお O157 による食中毒あるいは感染症の散発事例が多発し、再び集団感染が起る兆しを見せており、今一度警鐘を鳴らす必要から、公衆衛生面から眺め、O157 集団感染とその対策の全貌がわかる特集を組むこととなった。

特集は(1) O157 の細菌学および検出法（1, 2 席）、(2) 臨床症状と治療法（3 席）、(3) 行政の対応（4, 5 席）、(4) 原因究明のための疫学調査（6 席）、(5) 集団発生事例（7, 8, 9 席）から成り、執筆者は O157 に関し各分野で中心的な働きをされ、国立公衆衛生院で O157 に関する講義・講演を担当して頂いている先生方に主としてお願いした。即ち、

1 席「O157 の流行の実態とその対応」では、O157 の細菌学あるいは分子生物学を中心に、厚生科学研究腸管出血性大腸菌に関する研究班の班長をされている国立感染症研究所細菌部渡辺先生に、

2 席「腸管出血性大腸菌 O157 の検査法の確立」では、迅速で感度が良く正確な O157 の検出法につき、精力的に研究されている神奈川県衛生研究所細菌病理部山井・大澤先生に、

3 席「臨床症状と治療」では、1990年に埼玉県浦和市の幼稚園で、日本で初めて O157 集団感染症の発生をみて以来、深く O157 感染症の臨床に携わっておられる埼玉県立小児医療センターの城先生に、

4 席「厚生省の対応」では、行政の対応として厚生省が行っている今日までの対策のすべてにつき、厚生省食品保健課南先生に、

5 席「とちく場における汚染防止対策」では、米国などの O157 食中毒事例から原因食品として牛肉との関連性が強く疑われているため、食肉原料の入手先であるとちく場での O157 汚染防止対策を、担当者であり実際にタッチしておられる厚生省乳肉衛生課加地先生に、

6 席「腸管出血性大腸菌 O157 集団感染事例への保健所の対応」では、保健所の対応、特に原因究明のための疫学調査方法につき、盛岡市、帯広市の O157 感染集団発生時に学術専門家としてチームに参加されている国立公衆衛生院尾崎、饒輪先生に、

7 席「岡山県邑久町における集団感染への対応と課題、保健所機能の再点検」では、昨年 5 月 O157 集団感染が起き、突然のことで大変な苦勞をされ、そのときとれた対応策が後に続発した集団発生対策に役立った事例を邑久地域保健所發坂先生に、

8 席「岩手県盛岡市における対応と課題」では、昨年 9 月末に盛岡市で起き、早期に原因食品の特定ができ重症患者のなかった O157 感染事例を岩手大学品川先生を代表に、

9 席「北海道帯広市で集団発生した腸管出血性大腸菌 O157 感染症について」では、気温も下がり O157 集団感染も終結かと思われた昨年 10 月下旬、帯広市で集団発生し、原因食品の特定ができ溶血性尿毒症症候群による重症児が多かったにもかかわらず全員が回復した事例を帯広保健所米川先生にお願いした。

執筆者の O157 感染撲滅への思いを込めたこの特集が公衆衛生関連従事者の方々において、今後の O157 感染の予防対策や不幸にして集団発生した際の対応策の道標となれば幸いです。

(国立公衆衛生院衛生獣医学部長)